ジャンと Keita の隊長退屈男

二篇の季節と一篇の決壊から成る叙事詩

共作　ジャン・ランベール＝ヴィルド　三島景太
平野暁人
日本語上演/フランス語・英語字幕
出演　三島景太

作・演出・総指揮　ジャン・ランベール＝ヴィルド
翻訳　平野暁人
照明　ルノー・ラジエ
技術指揮　クレール・サガン
音響　クリストフ・ファリオン

演出助手　アリシア・カルソンティ
舞台美術　ジャン・ランベール＝ヴィルド
衣装　アニック・スレ
衣装制作　パスカル&ステファンヌ・リシー
アントワネット・マニー
劇場内アトリエ作業監督　ブノワ・ゴンドゥワン
舞台写真トリスタン・ジャンヌ＝ヴァレス
共同制作　カーン国立演劇センター

ふじのくにせかい演劇祭

不退転

―第一の季節―

第一景

幾重にもなる国旗や装飾が数多の武勲を誇示している
どこかで音楽隊が「露営の歌」を演奏している
赤い装束に身を包み、踊っている女がひとり
軍服姿の磐谷和泉隊長
右手には扇子
その顔に疲労の色は微塵も窺えない
背筋を正し、威厳に満ちて

ニッポン、ニッポン
日出づる国の美しき大地。

この両脚に
わたしは抗えない
もう従うわけにはいかないんだ
そんな命令には
頼むから

揺さぶるのはやめろ！

揚羽のごとく舞うあなたの指先
わたしのまなこを鈍らせる
あなたは一輪の花
風にさらわれてゆく
その一挙手一投足が
舞い散らす無数の花粉
揺さぶるのはやめろ！
わたしは杭じゃない
あなたが憩い
背中をすりつけるようにと
大地に打ち込まれた一本の杭なんかじゃない
揺さぶるのはやめろ！

お父上に願い出ました
なんとかお会い頂きたい
するとお聞き入れくださった
糊のきいたシャツに身を包み
直立不動のわたし
そうして我が身に課せられた務めと

運命と
この心とに賭していた
お父上は差し向かいに立たれていながら
決して私の目を見ようとはなさらず
揺さぶるのはやめろ！

言葉にすがって
毅然として己を奮い立たせてくれるような言葉に
けれど
言葉たちはことごとくロのなかに留まり
絶えずおののき震えながら
ほのめかすようにして
君たちが結ばれるのは
難しいんじゃなかろうか、と
そうして無理だと言うのを避けた
「あの人の顔はまるで木の皮
どんな苔にもなびかない
両のまなこは土気色
女がひと撫でふた撫でしても
身体を覆うぶあついこぶを
払い落せやしないはず

手は石灰の匂いがするの」
揺さぶるのはやめろ！
一言一句たがわない
あなたはわたしという男のことを
そんな風に伝えていた
心はきりきり締めつけられ
どんどん重さを増してゆく
息も絶え絶えになりながら
なんとか正気を取り戻し
直立不動のままのわたし
そうしてお父上にお礼を申し上げました
揺さぶるのはやめろ！

わたしの使命は
犠牲を奨励し
戦争にロづけし
軍服を抱きしめて
軍旗に孕ませること
この身は祖国のために
両の足は逃げ出したりしない
命令が聞こえているかぎり

ご存知でしょう
服従のうちには
野蛮さが潜んでいると
極限まで削ぎ落とされた身体を飾り立てるのにうってつけの野蛮さが
揺さぶるのはやめろ！

シャツが汗で酔い潰れそうだ
熱があるわけじゃない
あなたの残影をしぼりだす
揺さぶるのはやめろ！

汗をかく
汗をかく
ひたすらに
ついにはシャツの糊が溶けだし
肌にこびりついて
そのまま固まってゆく
もうじきあなたという存在は
舞い散らされた花粉に結晶するだろう
爪のなかにびっしりつまった花粉に
そうして両の足は

前へと進ませてくれるはずだ
揺さぶるのはやめろ！

第二景

夜

爆発音が空を切り裂く
塹壕の底、泥に塗れた、磐谷和泉隊長
背筋を正し、威厳に満ちて

応答せよ
応答せよ

受話器を床に叩きつけんばかりの勢いで苛立ちながら

応答せよ
応答せよ
こちら３２６地点
磐谷和泉である
あの大砲をだまらせろ！
あの大砲をだまらせろ！
鼻っ柱をへし折っちまえ！
もう聞きたくないんだ

砲撃の準備かなにかしてるようだが
俺にはどうでもいい
報告？
結構でございますねぇ
おめでたい話だ
あの大砲をだまらせろ
聞こえるか
そう
すぐにだ
これは命令だぞ
あの大砲をだまらせろ！
畜生が
黙らせろって！

伍長
あの丘を攻め落としにかかるぞ
我らのこの手に奪いとるんだ
まだ見ぬ敵どもが
我らに授けてくれるだろうよ
歓待という名の栄誉をな
全員

装備にかからせろ
弾を撃って榴弾を投げ込め
着剣
落ち着いていくようにな
貴様ら頬が真赤だぞ
小娘みたいじゃないか

伍長
全員
ゲートルをきつく巻きなおせ
痛いの
痒いの
一切の泣き言は許さん
愚痴ひとつこぼすな
耐えられん
いいか！
どうにも耐えられんのだ
蓄音器をつないで
俺の大好きなあの歌を流してくれ
闘わねばならんといえど
せめてもちょいと音楽くらい
やってもらわにゃかなわんぞ
胸を開くんだ
そうして心臓をかき立てろ
不協和音や無秩序に
取り囲まれている限り
真の高まりに行き着くことなどありえない
蓄音機は
ゆるみきった身体をも煽りたて
ふぬけたきった精神にまでも陶酔をもたらすはずだ

伍長
全員
しゃんと立たせろ
この穴からは
這いずり出てゆくわけにはいかんぞ
我々は天敵を前に縮みあがった
けだものじゃあるまいし
身体はいわば機械も同じ
よじれまがるはずのないもの
人間の骨は線の連なり
交り合いそそり立つ

きれいさっぱり消し去るんだ
貴様らの身体を揺さぶっているその大仰な仕草を
貴様らは軍人である
腰をくねらす踊り子ではないのだ

伍長
全員
身体を洗わせろ
一分の隙もない身なりをさせろ
死に赴かねばならぬとすれば
身を清めさせておくことだ
泥にまみれた体たらくでは
名誉と栄光に身を晒すこともままならんのだから

伍長
突撃の直前に
打ち上げさせろ
照明弾を
迫りくる我々の姿をみせつけてやるとしよう
昼日中に進軍するぞ
剥き出しの素顔を天にさらして

全員下がってよろしい

磐谷和泉隊長は汚れた着衣を脱ぎ棄てる
左手には扇子
蓄音機から流れ出すズンドコ節

天皇のため大日本帝国のため

扇子を片手に舞い踊る隊長
ひとしきり踊り終えると不意に気色ばみ声を荒げて

静かにしてろ！
馬鹿野郎が
静かにしてろ！
これからお祈りをしようってときに
野暮なことを抜かすな！

激しい戦闘が続いている
爆音が聞こえる
隊長は振り向く

頭のなかの鉛玉

隊長は気をつけの姿勢をとる

頭のなかの鉛玉
田んぼに植えた稲の穂よろしく
たわわに実るか
さもなきゃカラスの腹を満たすか

崩れ落ちる隊長
戦闘音がかすんでゆく

第三景

磐谷和泉隊長は野戦病院の寝台で横になっている
頭には包帯が巻かれている
若い看護婦がたっぷり水の入ったコップを手に寝台へ歩み寄り
隊長の顔をのぞきこむ
隊長は立ち上がる。
背筋を正し、威厳に満ちて

壁に身をあずけて
よく
ひとりつぶやいている
俺は火の消えたなにかのようだ
死んでるわけじゃない
断じて
ただ消えているだけだ
そんなときには
いかな光の道筋も
俺にぬくもりを取り戻してくれやしない
この血潮に欠けているのは

太陽の小さなかけらたち
自由自在に
血流をかけめぐり
力を与えてくれればいいものを
俺の血は
さぞ黒々としているにちがいない
そしてざわついている
いついかなるときも
全身の血管がふくれあがる
とりわけ額のありさまときたら
有刺鉄線さながらに
縦へ横へと管を走らせこの顔を分かつ
そうして両の手が
俺を覆うおうとつのへさきに
憩わんとするのを許さない
もしかして
俺にはまだ血が有り余っているのか

女たちは
その身を空ける
次第、次第に満ちる毎

自らに巣食う汚れた血をすべて
吐き出す術をしっている
無論
そう易々とはいかぬにしても
さりとてやはり
自ら払い清めうるからには
さほど四体液に悩まされずともいられるはず
俺たち男は
そうはいかない
血を喪うなど
そうそうありはしない
あるとすれば戦争だけ
でなければ医術か
ただし血液もろとも喪われるのは
四体液よりむしろ欲望

男子たるものにとって
なにを措いても貫かんとする
きちがいざたの命題こそは
自らのうちに欲望を
ただそのひとかけを
かき抱いて譲らぬこと
その手にしうるあらゆる事物のうちで
なにより大切といわんばかりに
兵士たちは
隊列を成し
支え合う
ある欲望を守るためなら
自己を欲求の犠牲に捧ぐことをも厭わず
男たちの愛国は
もはや方便にすぎない
約束された絶望に託してやりすごす
ひとつの方便にすぎない

すなわち
戦争は
このうえなくおぞましい局面にあって
いっそう盤石にするだけなのだ
妄執の如きその一念を
そうしてどこぞの旗にくくりつけ
砲弾をもちだし
呼び覚まさんとする

俺は
ゆっくりと壊れゆく男
我が欲望のすべては
祖国と陛下へ捧ぐ
大義こそはなににもまさると
ひたすら信じ
慰みとして

額は雨をずっしりと吸い込んだ海面
両の手がねばつく
喉が渇いた!

第四景

ジャングルにぽつんとはられたキャンプ
辺りには竹林が天に挑むがごとく伸びている
哀しげに垂れ下がっている支柱の日の丸
その脇で酒を呑む磐谷和泉隊長
背筋を正し、威厳に満ちて

魂の悦楽は行動の内にある

泥、泥、泥

ただそれだけ

血気は兵士の才覚だ

泥、泥、泥

ただそれだけ

昼は

景気よく交わされる弾丸の数々が
壁のわら土をなでつけ

泥、泥、泥
ただそれだけ

夜は
密やかなる両の手が
見張り番の喉元をかき切る

人生ってやつは素晴らしい

文子、雅子
大好きな姉さんたち
覚えていますかあの幾年月
隅っこの薄暗がりに
私が身をひそめていた時のこと
本能はどこまでも惜しみなく
あなたがたはすべて受け容れてくれた
世界はあんなにもあまやかでした
父上は

大きな武者人形を
与えてくれましたね
私よりも大きな人形だった
母上は
その人形に羽織袴をこさえてやって
次郎おじさんは
立派な家紋を入れてやった
あの武者人形は
武勲をもたらす縁起物で
顔つきはなにやらいかめしく
微笑みを浮かべたりはしなかった
自らの意思はもたず
常に己の義務を果たさんと身構えていた
姉さんたちときたら
私をくくりつけておいた乳母車に
そいつも乗せて
公園じゅう散歩させてくれましたね
父上たちは
縁台でお茶をすすりながら
私たちが前を通り過ぎるたび
拍手喝采してくれました

私はあれが大のお気に入りで
気高く尊大なあの武者人形が

大好きな姉さんたち
もしも今の私をみてもらえたなら
こんなに立派に育ったと
あの人形より大きくなったと
ずっとずっと大きくなったと
人生ってやつは素晴らしい

手を染めよう
この途方もなく傑作な試みに
建ててみせよう
祖国ニッポンの比類なき栄光を期して
防壁だろうと道路だろうと
やがて雨が溶かしてゆくやもしれぬが
我らの高潔なる薫陶が
この地を覆い尽くし
繁栄をもたらすのだ
平和と歓びとは
木から木へとこだまし合い

我らが文明化の使命は続行される
そこかしこで歓待の声を浴びながら……

銃声が何度も炸裂する

まったくもって素敵な日だねぇ
弾丸たちが俺をくすぐっては去ってゆく
もうさんざっぱら一緒に踊ったが
弾道ってやつはまるで謎だ
一発とて俺に飛びん込んできちゃくれないんだから
どいつもこいつも
犬のむくろにぶち当たる方が
この俺の生身に喰らいつくよりお好きなようで
正気を尻目に踊っていながら
お相手はいっこう現れぬまま

人生ってやつは素晴らしい

死ぬのがこれほど大事だとは

第五景

ジャングルがあたり一面をその壮大なる孤独で埋め尽くしている
太陽は絶頂に
泥水のなかに坐している隊長
背筋を正し、威厳に満ちて

ラッタッタドーン
ドーンドーン
ラッタッタドーン

ジャングルはどんな男の姿をも変えてしまう
そっとまとうドレスにして
頬をそめる泥
ジャングルは
俺たちを女にしてしまう
たわわに実った
自然が丸ごと
俺たちを種で満たす

ラッタッタドーン
ドーンドーン
ラッタッタドーン

俺は子孫を残さんだろう
なにもかもがじきに絶えてしまう
俺は遠からず
ただの名前に過ぎなくなる
どこの誰とも知れぬ名前に
忘れ去られた石碑に刻まれた
いくつもの名前にまぎれこんで
かつて夜明けをもたらした煌めきの数々は
闇に満たされたこの心に点々と灯る
たいまつでしかなくなるだろう

赤い装束の女が木立を縫って踊る

この両脚に
俺は抗えない
頬むから
揺さぶるのはやめろ！

太鼓の震えに煽られて
ついに精根尽き果てた
調子が外れてどこへやら
足取りも重くおぼつかなくなってきた
ジャングルのど真ん中で迷子になっちまったんだ
いまやすべては成されたのだから
疎ましい真似はやめてくれ
いい子だから
おうちへおかえり
揺さぶるのはやめろ！
我は磐谷和泉隊長である
揺さぶるのはやめろ！
これより俺は
死を約束された作戦へと突き進む
駈け抜けるのだ
壮麗なる群衆の波を
伝説へと続く雑踏の渦を
もはや命の安売りなどという次元ではない
それどころか
至高の犠牲に供するのですらない
最後に今一度

この両足は突き進む
俺は遥か彼方
人という人を引き離し
駈け出すのだ
駈ける
駈ける
息せき切って
叫びを上げて
人生ってやつは素晴らしい
人生ってやつは素晴らしい！

笑う

揺さぶるのはやめろ！
せめて鉛玉を額に一発
喰らい込んで死ねたなら
虫唾が走る
こんな汚らしい死にかたは
揺さぶるのはやめろ！

己の頭に鉛玉を撃ちこんだ磐谷和泉隊長

暗転

あらゆるものは宙吊りとなり、やがて崩れ落ちた

決壊

―あらゆるものは宙吊りとなり、やがて崩れ落ちた―

言葉を奪われ
隊長の両手は身体に寄り添い垂れさがって
ゆるみきった手綱さながら
ぶくぶくと泡立つ血液が漏れ出てゆく
こめかみから
片頬へ
首へと伝い
胸に沿って下ると
運河を切り拓きながら
果ては足の裏にまで

行き先を見失った自分自身に驚愕する

あたりにはただ
さざめく枝の波が打ち寄せ
波は風に追い立てられ
その彼方には斑紋に覆われた地平線が
かすんでいる

隊長はその有様を
突っ立ったまま無理をして

抗おうとしたせいだと考えた

死は幾何学上の問題に過ぎず
あおむけに倒れ込むがまま

急転

桜吹雪に義足の男

―第二の季節―

なにもない、なにも、なにも
なんにもみつからない

第一景

死者の咆哮……
どこでもないところ
夜の闇にちりばめられた星々
木の根元に横たわっている磐谷和泉隊長
頭の下には冷え固まった血を座布団代わりに
虫を捕食する虫が何匹か
餌たちがすっかり油断しきるのを辛抱強く待っている
背筋を正し、威厳を保とうと

ほらこの通り
横たわってる
むきだしのまま
犬っころよりみじめなざまで
力尽き
間の抜けたこの身体から

血気のすべてを抜き取られて
やれやれ
踊りにあんまり入れ込み過ぎた
足踏みにつぐ足踏みで
神経を違えちまったらしい
足が断たれて皮をはがれて
苦しい

シャツが汗でびっしょりだ
着替えなんてありやしない
苦しい

貴様らに
ひとつ勘弁願うとしよう
どうにも調子が芳しくない
地平線にはもう惹かれんのだ
無意味な一本の線にしかみえん
地表をかすめて
このうえなく卑猥にのびてゆく線
進んで行ければよかったのだが
もうあと少し

貴様らとともに
いかんせん足がないのだ
この辺で下がらせてくれ
幾日かゆっくり休むとしよう
ひとりになって
貴様らはこのまま進め
勢いを損なわぬよう
皆でたてたあの誓いの数々は
このやむ無き道のりの果てに
いかなる誘惑にもとらわれるなよ
敵を美しい女だと思え
奴らに飛びかかるのが貴様らの任務だと
面を引き締めろ
貴様らの顔は輝いているはずだ
はね返してきたあらゆる攻撃の波に洗われて

成すべきことなど他にはなにもない

私が帰ってきた暁には
どうか全員ひとり残らず
元気でいてくれるように

解散

闇夜にまぎれて闘う虫たち

心配するな
ひきしぼられて丸まって
うめいているのは肉体に過ぎん
心配するな
じきに交代の連中も来るはずだ
家へ帰れるんだ
あったかい味噌汁に
白い飯をたらふく詰め込む
てんこもりで
梅干しをのせ
納豆をかけて
裸足になってくつろげるぞ
両足を
冷水を張ったたらいに浸して
くたびれきった肌がすっかり
ふやけて
はがれおちるのを待つ

部屋の隅へ身をひそめて
心おきなく眠れるんだ
怖がらなくていい
いい子だ
もう終わったんだよ
そのままそこにおいで
動くんじゃないぞ
もがいてなにか意味があるのは
窒息しそうなときだけだ！

遠くに、どこかの連隊が虚ろな音楽を奏でている

ここだ
ここだ！
神様仏様
どうか俺も連れて行ってくれ。

第二景

死者の咆哮……
灼熱の大気が鉛の隔壁を立ち上げる
立ったまま両の手を口元で重ね合わせ、太陽を凝視する磐谷和泉隊長
その足もとには、むくんで青紫色になった舌が一枚、しわがれくぐもった
音が奏でるうめき声のなかで身をよじっている
背筋を正し、威厳を保とうと

助けてくれ
このまんまじゃいられない
立ったまま
炎天下にさらされるなんて
あんまりだ
裸の男の死骸だなんて
助けてくれ
なにかかけてくれないと
毛布を
誰か毛布をくれ！

美輪明宏『愛の賛歌』が流れ出す
あなたの燃える手で　私を抱きしめて……

こんなことってあるか
俺をこんなところへ置いて行くなんて
怖い
怖くてたまらない
こうしちゃいられない
俺の声が俺を離れて
牙を研ぐ
怒りを研ぎ澄ます
怒りを怒りで研ぎ澄ます
俺には聞こえる
奴らがうろついている
狂った奴らの群れだ
俺から喉をはぎとり
内臓を引きずり出そうとしてるんだ
俺の腹んなかになんざなにもないぞ
聞こえるか
なんにもだ！
俺の憤怒は

もうずっと前からズボンを汚してる

美輪明宏『聞かせてよ愛の言葉を』が流れ出す
聞かせてよ君の愛の言葉を……

黙れ！
とうに老いさらばえた女優ども
この身体が壊れちまったばっかりに
調子に乗ってぐだぐだと
おまえらなんだ
俺をずたぼろにしやがった張本人
もう何年も
おまえらを住まわせて
養って
黙れ！
もうおまえらの声なんか聞きたくない
うんざりだ
その鼻歌には
その奇っ怪な泣き言には

美輪明宏『水に流して』が流れ出す

なんでもない　なんでもないのさ……

いい加減にしろ！
聞いてるか
いい加減にしろ！

怒りに我を忘れ、
砂に埋もれみえなくなるまで
狂ったように舌を踏みつけ続ける隊長

歯はまだやられてないんだ
俺のこの肉体
こいつが敵前逃亡なんてしやがるなら
噛みついて喰いちぎってみせてもいい
揺さぶるのはやめろ
俺は踏ん張ってやる
務めに殉じて
塹壕に立ったまま留まろう
耳をそばだてていよう
おまえらになんと言われるか

けんけんしては足を入れ替えまたけんけん、
を繰り返す

この目の燠は
絶えてしまった
この足は炎に包まれている
俺はひとりだ
俺はひとりぼっちだ

第三景

死者の咆哮……
待ち構えている……
こわばった両手を発射筒にかけ、磐谷和泉隊長は歩哨に立つ。
吐く息が霧となって立ち上りツノを成して夜を貫く
背筋を正し、威厳を保とうと

我が嘆きに憤怒などもはやありはしない

欲望は蹄を剥がれた馬たちの群れ

見境なき嫉妬は手探りにまかせ
みじめだ
みじめでたまらない

戦争は底なしの腹
すべてを呑み込む
そして膨れ上がる
常にさらなる深みへと

いわば永遠の乳呑み児
食いものを与えてやらねばならぬ
常にさらなる食いものを
海は干上がり
空は色あせ
大地は自傷し
人々は共食いに興じ
自然は丸ごと
その身を差し出し苛むことで
飢えし乳呑み児のうめきを押しとどめんとする
やがて食うものがなにひとつなくなると
なおも膨れ上がる腹は
自らひりだしたものを食む

その腹
この身を捧げ
一生をかけて
育んできた腹
そいつが俺を種なしにした
俺は横たわる
疲弊し

空っぽの
からからで
己の死にもピンとこない

近寄るな
そのままそこにいろ
俺は捨て犬じゃないんだ
じきに女どもがやってきて
この身体に生気を吹き込んでくれる
母親たち
姉妹たち
女房たち
みんなして身体をもみほぐし
洗い清め
皮膚からはぎとってくれる
薄汚い脂をねこそぎ
衝突につぐ衝突
闘いにつぐ闘いで
つもりつもったこの脂を
そうしてぴったり仕立ててもらった
浴衣や羽織に袖を通して

毎日着かえたっていいし
裸でうろついたっていい
とにかく俺の気の向くままに
触るな
俺は強直症を患ってるんだぞ
そっとしておいてくれ
死
それはやわらいでゆくための
絶えざる訓練なのだ

埋めてくれなきゃだめだ
このままここに
骨をさらし続けた日には
未来永劫まちがっても許しちゃもらえんだろう

俺の腹はでかいんだ
飢えて死んじまう

第四景

死者の咆哮……
太陽のもとに響く叫び声
磐谷和泉隊長は森を彷徨っている
祈りが木から木へとこだまし
背筋を正し、威厳を保とうと

成仏に焦がれる一念が
恋し人々の戸口に立ち
忘却に声を嗄らす
願わくは己が冥福を祈ってくれんと

深呼吸！

声を張り上げ朗々と

兵士たる身体を
倦まずたゆまずさらには高めてゆく
それは疲労に屈さぬよう鍛えることであり
制圧する手段を授けることである
それぞれに
己が敵を
いかなる局面においても
それこそがあらゆる計画を成功に導く下ごしらえなのだ

深呼吸！

さあもう一度
立ち上がれ
一歩ずつだ
今度はきっとやれる

深呼吸！

崩れ落ちた男が赦しを得んと望むなら
さらなるあまたの失墜を重ねゆくのみ

深呼吸！

やりきるのだ

屈するな
慢心は希望の息の根を止める

深呼吸！

まっすぐ前を見なくちゃいかん
毅然として
決して顔を背けず

深呼吸！

安心しろ
その手で成すことの他はなにも起こらないからな

深呼吸！

万歳！
万歳！
万歳！

第五景

俺の汗は
怒りは
あてどもなくぶちまけられ
このどん欲な大地に吸い上げられる
不実な大地に
乳に吸いつかれるのだ
心が定まらない
みじめだ
みじめでたまらない

母ちゃん

誰にも
この身体の歌う声は届かないんだ
俺は
かかしだ
藁を抜かれた
豆粒みたいな雀を慄かせることすら
できないかかし
いいんだ、もうどうだって
お国も
陛下も
神罰も靖国も
みじめだ
みじめでたまらない

母ちゃん

俺の一物は
身体を離れて
汚辱の底に沈んじまった
てめえでちっぽけな墓穴を掘ってさ
そのなかで
縮こまって
闇と冷気に包まれ
芽を出そうと待ってるんだ
みじめだ
みじめでたまらない

揺さぶるのはやめろ！
俺の命の糸は
途切れた
もうこれ以上は抗うまい
俺の躯は
いかなる国家の序文をも記さぬだろう
俺の名は
いかなる顕彰にも与らんだろう
我が軍刀の煌めきに
若者たちを振り向かせる力はもはやないだろう
おまえらの殺戮に
この心臓の
切っ先は天を指し示し
そして吠えるのだ
吠える
己が恥辱を
嫌悪を
揺さぶるのはやめろ！
腹が爆発しかねない
持ってた火薬を喰っちまった
消化はできん

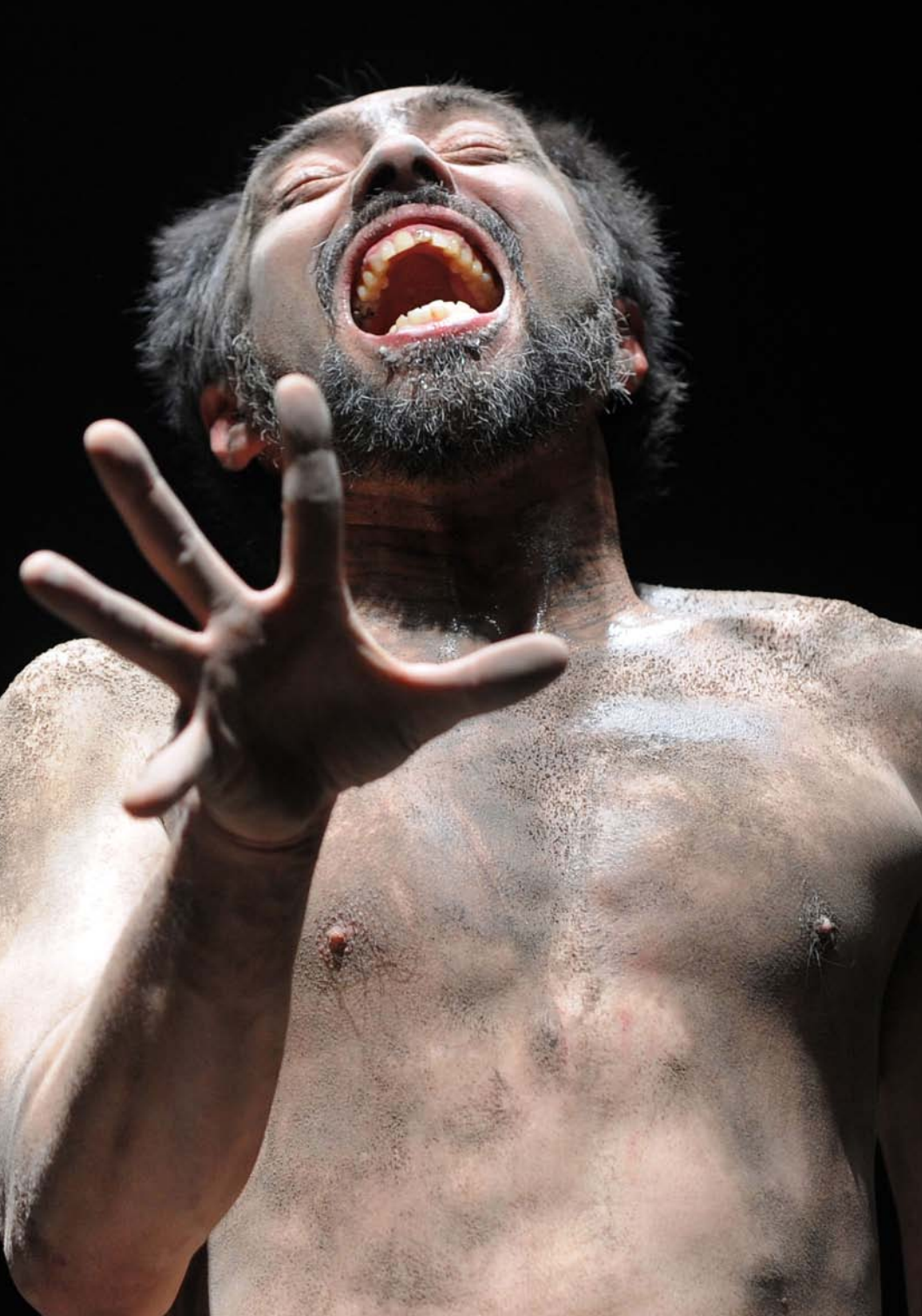
死者の咆哮……
明けの空が翡翠色のジャングルをぬらしている
通る人も絶えた
地蔵さながらわびしげに
縮こまった磐谷和泉隊長
その姿はいまやこけむした石のかたまりに過ぎず
薄もやに溶けてゆく
背筋を正し、威厳を保とうと

紅い鱗に覆われた蜥蜴が砂から砂の中から姿を現す

愛しいやつ
かわいいやつよ
俺が過ごしてきたすべての春が
おまえのうちに横たわっているね
愛しいやつ
かわいいやつよ
おまえをこんなにも待ちわびていた
大地を踏みしめていたこの両足
いまやなにものにも縛られていない

いまやなにひとつ感じない
俺は死んだんだきっと
こっちへおいで
その両手を俺の頭蓋骨に置いてごらん
だいじょうぶ
二度と再びなにひとつ俺から生み出されるものはないだろう
湯気も立たなきゃ
漬物にもなりゃしない
俺の闘いは終わったんだ
おまえに還るとしよう

踊る隊長
息も絶え絶えに
ひきつけを起こしたままの足がやぐらの中で踊り続ける

いまだ！

暗転
そして闘いは続いてゆく……